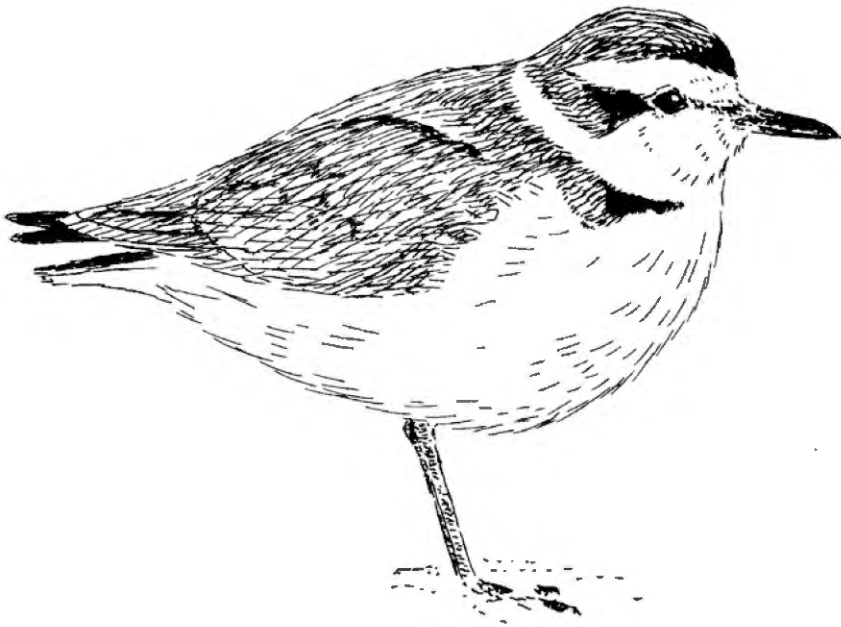


# しろちどり



《しろちどり》昔から浜辺で人々に親しまれてきたしろちどりは、豊かな自然のバロメーターとして県の鳥の候補にあげられ、1972年、県民投票によって「三重県の鳥」に選ばれた。現在、「指標鳥であるしろちどりの鳥の減少」という事実を、私たちは真剣に受け止めなければならない。

(財) 日本野鳥の会 三重県支部  
1993年5月《創刊号》

## 財団法人日本野鳥の会三重県支部設立のご挨拶

三重県支部長 杉浦 邦彦

当三重県支部は、平成5年3月5日をもって、(財)日本野鳥の会本部から正式にその設立が承認され、全国で82番目の支部になりました。

振り返ってみると、三重県支部の前身である三重野鳥の会(任意団体)が5~6人の有志によって設立されたのは、昭和46年、今から22年前のことです。はっきりした記憶はありませんが、日本野鳥の会が財団法人になって、まだ日も浅いころでした。理事の市田氏が松阪市に来られ、(財)日本野鳥の会の支部になるよう要請をされたことがありました。その時の三重野鳥の会の会員は極めて少なく、会そのものの存続さえおぼつかない状況でした。たとえば、探鳥会へでかけると「野鳥の会とは、野鳥を捕らえて飼う会なのか」と、まじめに質問されたりし、鳥を食べる会とまで言われなかったのがせめてもの救いでした。そんな県内の状況であったので、せっかくの勧誘にたいしても大変つれないご返事で終わってしまったのでした。

さらに相前後して、県内の企業の一つが、私たちに援助を申し出て下さいました。そのときは、本当に喉から手が出る思いでした。しかし、これも力がつくまでしばらく待っていただくよう丁重にお断りしたのです。それは、期待されるほどの活動ができるまでには、はるかに遠い道のりを感じていたからです。

あれから20年が経過し、人類全体が地球規模の環境保全に対し強い関心を寄せるようになり、社会全体の雰囲気うわべだけでも、なんとなく自然との共存が大切なことを

認識しだしたことは確かなようです。

ところで、三重県といえば伊勢神宮です。二千年の歴史が育んだ神道の「再生」と「平等」と「継承」の原理は、自然と人類が共存するための哲学と一致するものであるように私は感じます。そして、私はそれが一つの目標ではないかと考えており、これからは会員の方々とともに、野鳥だけにかぎらず、野鳥を通して自然との共存を大いに論議し、活動を続けていく所存であります。

この4月から、一会員の好意により事務所を提供していただけることになり、いよいよ支部活動のスタートを切りました。私たちは野鳥の代弁者として、野鳥を通じ自然の大切さや共存を訴えていくことに賛同いただける個人あるいは団体の方々に対して、ご参加くださることをお願いし、私の挨拶にかえさせていただきます。



日本野鳥の会 過去・現在・未来 (三重県支部顧問) 橋本 太郎

この度、日本野鳥の会三重県支部が発足いたしました。先ずはおめでとうございます。「支部をつくっては」という提案はずいぶん前から時々お奨めしていたのですが、なかなかその機運が来なかったようでした。実は、私は鳥に関心をもち、日本野鳥の会に入会してから六十年にもなりますが、その間公私の調査を続けながら考えていたことは、三重県は自然科学の育たない県だということでした。

一九五十年、昭和天皇が戦後の日本復興のため国内を巡幸されるうち本県へも来られる

ことになり、陛下が生物がお好きだから三重県生物目録を作成して差し上げようということになりました。県農林部が計画を立て、当時県立大学水産学部部長の岡田弥一郎博士を委員長に、県内外の動植物の専門家と委員会をつくり約一年間全県を対象に調査と採集を実施してでき上がったものが「三重県産生物目録」(一九五一年)でした。またその時の収集資料の鳥獣標本を中心として、県立博物館が設立されたのでした。私の本格的な調査と採集も、当時の目録作成の反省によって始

まっています。

今私は「野鳥」創刊号を出して来て見えます。表紙の色はうす茶になり背は破れていますが、戦中戦後大切に保管してきたものです。表紙標題の「野鳥」は毛筆で右から横書き、その下にこれも右書きで創刊號と赤で印刷されています。中央にコゲラ♂の毛筆画があり逢という署名は山口逢春畫伯のもので、裏表紙をみると昭和九年（一九三四）五月一日発行、梓書房とあり、編集者は会の設立者中西悟堂氏と竹友藻風氏（英文学者）と記されています。表紙裏の賛助会員名には、川村多実二氏、鷹司信輔氏、内田清之助氏、黒田長禮氏、山階芳磨氏、柳田國男氏、山下新太郎氏、新村出氏など鳥獸専門家の外に文学者、画家、民俗学者など多彩な人達全部で十五人になっています。

創刊の趣旨として「科学的、民俗学的、飼育的、美術的、文学的な諸方面から鳥を観察、研究、伝達する公の機関となり、月刊の機関誌「野鳥」に諸家の協力により文献を逐次掲載して学術、趣味両方面から真に健全な愛鳥の思想を普及すること」と書かれています。記事の内容も「塚造りの話」「アオバツクの食性」（昔はズをツとかいている）「小千鳥の巢卵保護の一奇習」「雀の郷愁」「早春の鳥」など内容にゆとりとうるおいのある記事が載っています。また鳥の写真も毎号多く出ていました。それから次第に年が経ちますとカスミ網禁止や籠飼鳥の禁止、狩猟法の改正問題等が論ぜられるようになりまして戦争末期から戦後物資不足で一時休刊しました。

現在の「野鳥」をならべて比較してみますと大変なちがいで、今は内容も複雑で広く、会員参加の部分も多く、環境問題が中心になってきたかのように見えます。たしかに昔の緑豊かで鳥の多かった自然は人間の身勝手のため「踏みにじられる」ような開発が続いています。これはおそらくどのように反対しても堰止められないでしょう。私の考える最大の原因は政治家や県知事、大商工業会社の社長などが自然科学、特に動植物の知識や教養のある人がいないからだだと思います。土建業者やレジャー会社は環境など考えていたら仕事にならないと思います。

ではこの先どうしたらよいか。難しい問題ですが私のささやかな経験では先ず正面からの反対や対立を止めることです。お互いの立場を考えた妥協点を探す努力をすることではないかと考えます。野鳥の会の活動も各地の会員が協力して社会に理解してもらえる資料の蓄積をして理論的に相手を受協点に導くような努力をしてはどうかと思います。

反対→署名→プラカード、団体行進などのマンネリズムをくり返すのは古い考えと思いませんか。それからもう一方で、小学校、中学校の理科教育を分類からやり直すことではないでしょうか。遠足に連れていっても道傍の植物や動物の名をきかれても答えられないような先生や、並んで歩くこともできない関心のない生徒では「自然の理解」など馬の耳に念佛ではないでしょうか。

分類について思い出しますのは旧県立師範学校にいた樋賀先生です。生徒達に分類を徹底的に教えたので、卒業後、先生として教壇に立ったその彼らは特に植物の名前をよく知っていました。「あの時覚えておいてよかった」という思い出話をよく聞きました。皆さんもこれから野外に出るとき、鳥だけを考えないで一般動植物にも、日の光、風の行方、雲の流れ、一つの石ころにも気をつけて、広く明るく優しい心で自然を観てほしいと思います。

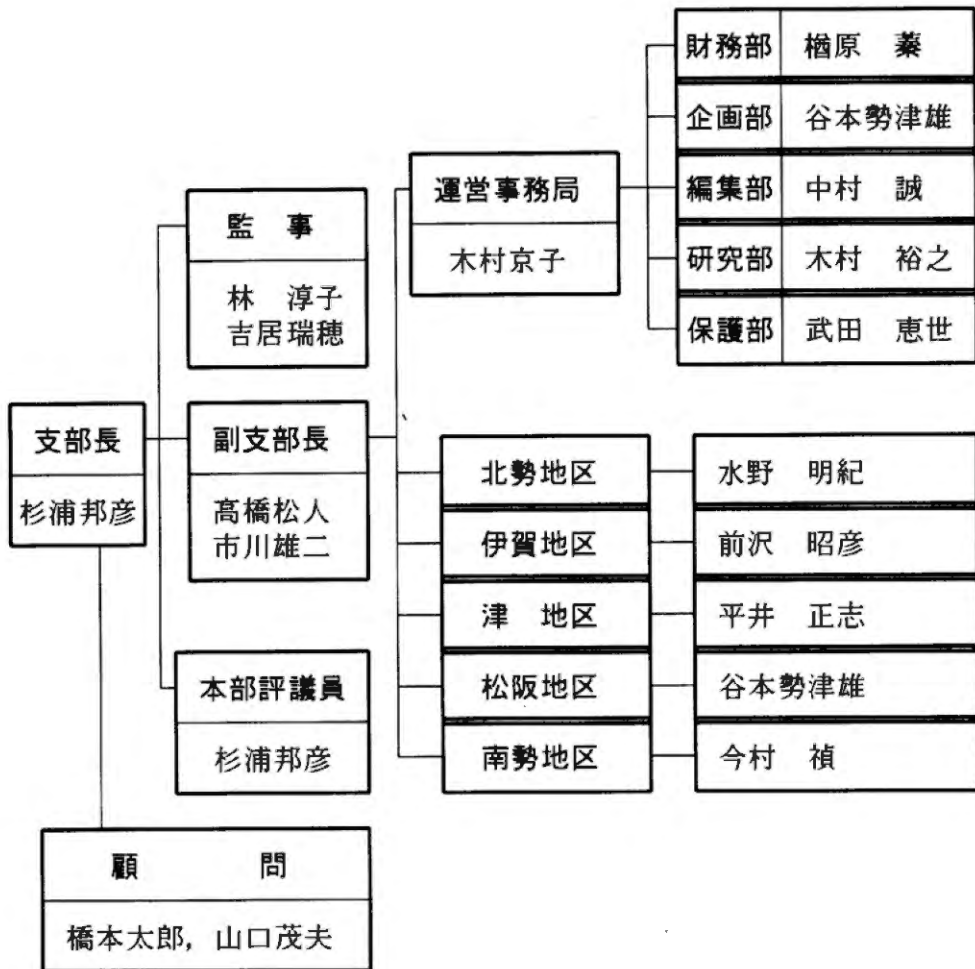
私の好きなことばー 一つの発見とそれから生じるいくつかの疑問ー

ニコ・ティンバーゲンー

ー疑問→解決→新たな疑問→と一生続くー



日本野鳥の会三重県支部役員構成表



理事 事務局の委員及び 地区の委員	鹿島素子 加藤貞徳 加藤征甫 倉田英雄 黒川昌吉 世古口有司 中村洋子 西村幹和 西村泉 橋本祐子 濱田 稔 濱中明代 宮田たつ 山中久次
-------------------------	---

財団法人日本野鳥の会三重県支部'93年度予算

収入の部			支出の部		
科目	金額	備考	科目	合計	備考
引継資産	754,631	現金¥154,631 預金¥600,000	通信費	151,700	支部報送料他
支部会費	460,000	¥2,000×230人	旅費	20,000	評議員旅費
			会場費	35,000	写真展、研修会他
			印刷費	129,700	総会、支部報他
			備品費	70,000	会長印他
			消耗品費	41,500	封筒、用紙他
			光熱費	10,000	事務所電気水道代
			雑費	2,100	
			次期繰越	754,631	予備費
合計	1,214,631		合計	1,214,631	

## 探鳥会報告

### ○磯津・鈴鹿川派川平日探鳥会

- ・日 時：1993年4月9日（金）晴れ、風強し。干潮13:43
- ・参加者：
- ・担 当：鹿島素子、濱中明代
- ・観察種：カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ゴイサギ、ダイサギアオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、キジ、クイナ、バン、オオバン、シロチドリ、メダイチドリ、ケリ、ハマシギ、イソシギ、オオソリハシシギ、タシギユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ウグイス、ホオジロ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 以上42種
- ・メ モ：カモはめっきり少なくなった。オオソリハシシギ（♀2、♂1）、メダイチドリなど季節の鳥の姿も出始め、春らしくなってきた。風が強く肌寒い一日だったが、和気あいあいとして、平日探鳥会も定着してきた感じである。（濱中明代）

### ○水曜亀山探鳥会

- ・日 時：1993年4月14日（水）晴れ。09:20～11:30
- ・場 所：八幡神社～むく川～亀山公園
- ・参加者：
- ・担 当：榎原薬
- ・観察種：コサギ、カルガモ、キジC、バン、キジバト、カワセミ、コゲラC、キセキレイ、セグロセキレイS、ヒヨドリ、モズC、トラツグミC、シロハラC、ツグミ、ウグイスS、シジュウカラS、メジロ、ホオジロS、アオジ、カシラダカ、カワラヒワS、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上25種 C印は声のみ、S印はさえずり
- ・メ モ：“さえずりを聞こう”というテーマで第1回目を行いました。聞いたのはセグロセキレイ、ウグイス、ホオジロ、カワラヒワの4種で、自分で作る”ききなし”は新しいものはできませんでした。（榎原薬）

### ○鳥羽金比羅平日探鳥会

- ・日 時：1993年4月16日（金）曇り。09:10～12:00
- ・参加者：
- ・担 当：吉居瑞穂、橋本祐子
- ・観察種：カワウ、アオサギ、トビ、サシバ3、アマツバメ、コゲラ、ツバメ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、シロハラ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ60+、ホオジロ、アオジ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、以上23種
- ・メ モ：サシバの春の渡りが見られ、渡り途中のメジロが桜の花に群れていた。街を歩きながらツバメの巣を観察、ツバメの巣作りの苦心が察せられる。コシアカツバメにのっとられた巣もあった。雑木林の芽吹きやまだ残っている桜の春の景色を楽しむ。（吉居瑞穂）

### ○全国一斉干潟観察会（鈴鹿川河口）

- ・日 時：1993年4月18日（日）晴れ。10:00～12:00 干潮10:05
- ・参加者：25名。
- ・担 当：市川雄二、木村裕之
- ・観察種：カイツブリ、カワウ、コサギ、アオサギ、ヒドリガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、シロチドリ、ダイゼン、キョウジョシギ、ハマシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、ウミネコ、コアジサシ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ツグミ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 以上25種



- ・メ モ：干潟観察会は前半を野鳥、後半を干潟の生物と植物に分けておこなわれた。ちょうど、休日を楽しむ潮干狩りの人たちがとても多く、それに遠慮してか鳥影はやや少なかったようだ。でも、この日初めてコアジサシの群れ50羽くらいが見られ、初夏を感じた。干潟の生物をみんなで集め解説を聞く。浜辺の植物の多くが川の上流からの汚染で変化する様子も観察した。(鹿島素子)

#### ○全国一斉干潟観察会(櫛田川河口)

- ・日時：1993年4月18日(日) 晴れ。干潮10:05
- ・参加者：13名
- ・担当：武田恵世、谷本勢津雄
- ・観察種：カワウ、コサギ、チュウサギ、アオサギ、ヒドリガモ、マガモ、シロチドリ、ハマシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、ウミネコ、ヒバリ、スズメ、ハシボソガラス、以上14種
- ・メ モ：中潮にもかかわらず、すごい人出があり鳥は少なかった。ハマシギをすぐ近くで観察できたのが救いになりました。干潟の環境が少しずつ悪くなると貝の種類が変わってしまうという説明がありました。環境をこれ以上悪くしないようにするためには何をしなければならぬか、皆で考えて行動しませんか。(谷本勢津雄)

#### ○全国一斉干潟観察会(宮川・外城田川河口)

- ・日時：1993年4月18日(日) 晴れ。09:00~14:00 干潮10:05
- ・参加者：
- ・担当：林淳子
- ・観察種：カイツブリ3、カワウ±20、ダイサギ1、コサギ5、アオサギ2、カルガモ3、ヒドリガモ37、トビ10、シロチドリ2、メダイチドリ1、ケリ2、ハマシギ35、イソシギ1、ユリカモメ±60、キジバト3、ヒバリ6、ツバメ6、タヒバリ1、ヒヨドリ5(渡り±360)、モズ1、ツグミ4、セッカ10、ツリスガラ3、ホオジロ5、カワラヒワ1、スズメ12、ムクドリ2、ハシボソガラス10、ドバト4 以上29種
- ・メ モ：漁港から浜までの探鳥の後、干潟生物の観察。共催の自然観察指導員の方の干潟の働きや鳥にもつながる食物連鎖のことなど、紙しばいを使ってのお話があり、干潟の重要性を改めて考えるよい一日であった。これを機会に少しでも多くの人が開発などによる破壊のニュースが流れたときなどは、保護活動に関心を示し行動を起こしてくれることを期待したい。(林淳子)

#### ○玉城町田丸城跡平日探鳥会

- ・日時：1993年4月30日(金) 曇りのち雨。09:30~11:40
- ・参加者：
- ・担当：西村泉、吉居瑞穂
- ・観察種：キジバト、カワセミ、ツバメ、ビンズイ、ヒヨドリ、シロハラ、ヤブサメ、ウグイス、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上15種 (観察は、片側25名のラインセンサスでおこなった。)
- ・メ モ：あいにくの天気にもかかわらず、たくさんの人に来ていただきました。まずは、イカルの声に迎えられ、カワラヒワ、ビンズイがじっくり見られました。初めての方にとっても喜んでいただけて、うれしく思いました。(西村泉)

#### ○松阪公園探鳥会

- ・日時：1993年4月29日(木) 小雨。09:30~11:30
- ・参加者：
- ・担当：中村洋子

- ・観察種：キジバト、ヨタカ、ツバメ、ビンズイ、ヒヨドリ、アカハラ、ツグミ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、シジュウカラ、カワラヒワ、スズメハシボソガラス以上14種
- ・メモ：小雨の中、かさをさしながらの探鳥会でした。雨でもウグイスはよくさえずっている。ヨタカは杉の木の枝に座ってうす目を開けていた。動かないのでじっくり観察できた。（中村洋子）

○愛知・三重合同木曾岬鍋田干拓地探鳥会

- ・日時：1993年3月28日（日）雨。10:00～12:00
- ・参加者：50名（三重県からは13名）

・担当：水野明紀

- ・観察種：カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、チュウヒ、キジ、コチドリ、ケリ、タゲリ、イソシギ、タシギ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、タヒバリ、ヒヨドリ、ツグミ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシボソガラス、ドバト 以上35種
- ・メモ：雨天にもかかわらず多数の参加者があり、弥富野鳥園から自家用車に分乗して、鍋田農地、木曾岬干拓地を探鳥した。両地でチュウヒ、キジ、カワセミおよびツバメなど35種を確認。弥富野鳥園にて鳥合わせを行った。その後で、今後は愛知・三重合同で次のとおり実施することとした。（水野明紀）

○愛知・三重合同木曾岬鍋田干拓地探鳥会

- ・日時：1993年4月25日（日）晴れ、風強し。10:00～12:30
- ・参加者：三重県支部からは、

・担当者：濱中明代

- ・観察種：カイツブリ、カワウ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、カルガモ、コガモ、チュウヒ、キジ、バン、コチドリ、ケリ、キョウジョシギ、クサシギ、タカブシギ、チュウシャクシギ、タシギ、オオジシギ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、ツグミ、セッカ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシボソガラス、ドバト 以上34種
- ・メモ：木曾岬をサンクチュアリにという運動の第2回の合同探鳥会でした。前回は雨に降られ、今回もまた強風という悪条件でしたが、多数の参加者があり、両県の交流の場として役立っていると思います。鍋田では田植えが終わっているところもたくさんありました。（濱中明代）

○愛宕川平日探鳥会

- ・日時：1993年5月6日（木）晴れ。09:30～11:00
- ・参加者：

・担当：橋本祐子、中村洋子

- ・観察種：ダイサギ、コサギ、カルガモ、トビ、コチドリ、ムナグロ、ケリ、ウズラシギ、キアシシギ、チュウシャクシギ、ヒバリ、ツバメ、モズ、ツグミ、セッカ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス 以上28種
- ・メモ：愛宕川西側の水田は住宅化が進んでいます。ムナグロ？ダイゼン？よく似ているので識別がむずかしい。みんなでよく観察してムナグロと見分けました。（中村洋子）

○バードウィーク偕楽公園探鳥会

- ・日 時：1993年5月9日（日）曇り後雨。10:00～12:00
- ・参加者：

\*杉浦邦彦、\*高橋松人、\*谷本勢津雄、

(\*)印はリーダー

- ・報告者：橋本祐子
- ・観察種：カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、チュウサギ、コジュケイ、キジ、バン、ムナグロ、キジバト、カワセミ、コゲラ、ツバメ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、アカハラ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、ヤマガラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス杜鵑SP。 以上28種
- ・メ モ：3班に分かれ、公園とその周辺を探鳥した。公園は清掃奉仕の人でいっぱいであったが、渡りの途中のムシクイ類や仲むつまじいキジバトヤマガラの番いを観察できた（ちなみに、終了後雨になった）。

○水曜亀山探鳥会

- ・日 時：1993年5月12日（水）晴れ。09:20～11:35

・参加者：

・担 当：楢原葵

- ・観察種：カイツブリ、コサギ、キジ\*、キジバト、アオバト7、コゲラ\*、ツバメ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ\*、ウグイス\*、シジュウカラ\*、ヤマガラ\*、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上18種 (\*印は声のみ)
- ・メ モ：テーマ”取りの子育てを見よう” 5月7日の下見の時は、カイツブリが子供を3頭背中に乗せていたが、今日は見られなかった。

○青山町大村神社（むささび）探鳥会（？）

- ・日 時：1993年5月15日（土）18:50～20:30

・参加者：

・担 当：武田恵世、山中久次

・観 察：ムササビ3

- ・メ モ：ムササビと夜の野鳥をたずね、県内外の家族連れら約35人が参加した。夕暮れ、神社に着いた一行にさっそく「ぎゅるる・・くる・・」の求愛の声でしょうか、うっそうとカシや杉の大木の中から聞こえてきた。驚かさないように赤いセロハンをかぶせた懐中電灯で白く光るムササビの目を探しあて「あっ、あそこにいた!」。座布団のような大きなまくををを広げて滑空する姿を間近に見られて興奮がおさまらない初夏の一夜でした。





野鳥情報 1993年2月～5月

02/13	ショウドウツバメ±20	五十鈴川浦田橋	杉浦邦彦
18	フクロウ(S)	四日市市桜町	加藤征甫
03/01	ウグイス初鳴き	津市一身田豊野の池	新谷宇一郎
04	ウグイス	伊勢市内宮	杉浦邦彦
12	トラツグミ(囀)	伊勢市内宮	杉浦邦彦
13	タヒバリ	津市一身田豊野の池	新谷宇一郎
24	ツバメ初認	津市一身田豊野の池	新谷宇一郎
12~15	トラツグミ(囀)	猿田彦神社森	杉浦邦彦
04/01~05	ヒレンジャク13	伊勢市役所横	世古口有司
03	アオジ(S)、ウソ(S)	猿田彦神社	杉浦邦彦
07	アマツバメ±50、イワツバメ±50	伊勢宇治橋上空	杉浦邦彦
08~13	ヒレンジャク±10	五十鈴川公園	大田美代
09	エリマキシギ1、セイタカシギ♂1	愛宕川	林淳子
11	マヒワ3	津市一身田豊野の池	新谷宇一郎
14	アオバト1	伊勢市外宮・勾玉池	世古口有司
14	ヒレンジャク±10	宮川堤	今村禎
16	アマサギ16(初認)	四日市市桜町	加藤征甫
17	ツツドリ(S)	四日市市桜町	加藤征甫
18	ユリカモメ1(青色足環)	鈴鹿川派川河口	市川雄二
20	アマサギ	玉城町	西村泉
21	センダイムシクイ	伊勢市藤里町	吉居瑞穂
22	ツグミ(S)	猿田彦神社	杉浦邦彦
23	オオヨシキリ	櫛田川	西村泉
	オオヨシキリ	一色町	世古口有司
23	オオルリ、ヤブサメ、 サンショウクイ	伊勢市藤里町	吉居瑞穂
		伊勢市藤里町	吉居瑞穂
24	イカル	津市一身田豊野の池	新谷宇一郎
	センダイムシクイ(S)	猿田彦神社	杉浦邦彦
30	アオバズク(S)(初認)	鳥羽市鳥羽	中井巽
05/01	トラツグミ、ジョウビタキ	伊坂ダム	水野明紀
	センダイムシクイ	三峰山頂	山中久次
02	トラツグミ(S)	四日市市桜町	加藤征甫
04	オオルリ、ミソサザイ	湯の山蒼滝	熊澤正継
13	サンコウチョウ♂1♀1	四日市市桜町	加藤征甫
15	サシバ1	上野市野間	山中久次
17	カッコウ(初認)	上野市野間	山中久次
	タマシギ	上野市東高倉	山中久次

保護コーナー

○傷病野生鳥獣ボランティア制度について

三重県には傷病野生鳥獣を救護するため、県や市町村の窓口の他に鳥獣保護員、野生鳥獣ドクターなどの制度があります。しかし、これだけでは十分な対応ができないので、更に身近かなところで傷病野生鳥獣の救護方法を教えたり面倒をみたりする人を増やすため「傷病野生鳥獣救護ボランティア制度」をもうけています。

(傷病野生鳥獣救護実施要領による)

○傷病野生鳥獣救護ボランティアに登録している会員

北勢地区 鹿島素子  
津地区 濱田 稔  
森下 誠  
森下美代子  
平井正志  
松阪地区 谷本勢津雄  
伊賀地区 山中久次  
伊勢地区 杉浦邦彦  
中世古哲司  
西村 泉  
吉居瑞穂

## 研究コーナー

○研究部より

木村 裕之

\* シロチドリ、コアジサシの繁殖期の観察記録を集めます。

今まで三重県では、何度かシロチドリ、コアジサシの調査を行ってきましたが、広い範囲を一人で調べるとなると、どうしても見落としも出てきます。そこで今年度は、

- ①新しい繁殖地の発見
- ②既知の繁殖地の繁殖状況の動向

を主な目的として、調査というようにおおげさに考えないで、探鳥に出かけた際にはシロチドリ、コアジサシに注目してもらって、その観察記録を集めたいと思います。区域を決めて、詳しく調べてもらえるともっとありがたいです。

◇期間は 1993年5月～7月

◇場所はできるだけ詳しく

- ・点の場合・・・例：○○漁港北突堤から北に400m
- ・区域の場合・・・例：○○川河口左岸から△△漁港まで

◇報告内容は

- ・日時、場所
- ・巣やヒナの数
- ・繁殖に失敗した場合のその原因
- ・巣やヒナが見つからなくても、成鳥のペアがおり繁殖の可能性がある
- ・南勢、尾鷲方面はどんな情報でも結構です（古くても可）
- ・できれば、前年との比較や周囲の環境についてのコメント、地図など  
以上のわかる範囲で

◇送り先：

〒

木村裕之まで（1993年8月10日頃までに）

○傷病野生鳥獣救護ボランティア研修会の報告 鹿島 素子

平成5年4月17日（土）、県教育文化会館で上記の研修会が開かれましたので概略報告します。まず、傷病野生鳥獣救護実施要領と保護飼養関連法令についての説明の後、高橋松人先生（三重県野生鳥獣ドクター）から野生鳥獣の救護について講義を受けました。

1. 国内での野鳥の生息環境の概要
2. 傷病鳥獣の概要
3. ヒナの食性
4. ヒナの飼育
5. 中毒症
6. 骨折、捻挫、脳しんとう
7. 傷病鳥の処置
8. 親鳥（成鳥）の保護
9. 人工えさの作り方
10. 治癒後、自然に戻す方法

等の内容でした。野生の生き物を保護するということはどういうことなのか、また、それらを自然に戻すことの難しさを思い知らされた一日でした。

## 事務局のコーナー

### 事務局所在地

(地図)

○事務所には毎月第1土曜日（13:00～17:00）に集まっています。お気軽にどうぞお立ちより下さい。他の日に利用したい方は、事前に事務局にお知らせください。

☆ かわせみ

(三重県支部顧問) 山口 茂夫

かわせみ。広辞苑によると、川蟬、翡翠、魚狗、ショウビン、ソニドリなど、雀より大形、尾はみじかく、嘴は鋭く、長大なり。体の上面は暗緑青色、背腰は美しい空色。水辺に住んで、水中の小魚をとる。巣は崖によこ穴を掘ってつくる。欧亜に分布す。樋口広芳の「鳥たちの生態学」十四章百五十五頁によると、全世界に八十数種、日本にカワセミ、ヤマセミ、アカショウビンの三種と沖縄の宮古島には、ただ一個の標本を残して絶滅したミヤコショウビンが生息していた。

兄が川仕事から帰って、「川蟬の巣を見つ

けたよ。茂夫、夜になったら捕りに行こう」十歳の私は喜んで後についた。家から五百米程はなれた河岸段丘二段目の崖に円い穴があいていた。兄の手の拳がかろうじて入る。とても深いので、唐鍬で入り口をこわして兄が左腕を差しこんだ。すぐに直角に穴が曲がっている。兄が頬を穴の入り口にくっつけて腕を差しこんでいった。穴は奥に入るほど大きくなっている。中はあたたかい。「居た、居た」と言って、無言の川蟬を捕らえてきた。用意の鳥籠に入れた。雀のようにばか暴れしない。暗いせいかもしれない。巣を造ってい

た場所は河岸段丘の一段と二段目の境の崖。腐蝕質の殆ど含まれていない、さらさらした砂地、極く微粒子の砂。高さ十五米、幅五十米程で本流に届くところ。川蟬は私の郷里の奥滞では、そうたくさんは目につかない。

目のさめるような美しい緑色が、川の岩の上から川の中をじっと見つめていて、ダイナミックに飛びこむ。そして魚をとる姿やすごい速さで谷川の水面に緑の風をおこして飛んでいく実に印象的で、いつも珍しく眺めていました。今その川蟬を籠に入れて見ている。兄弟は夢のようなうれしい気持ち。生け簀のはよをやったが見むきもしません。朝起きて見たが、一向餌にふれた形跡はありません。どうして食べないのかなと心配しました。

その頃父は朝鮮平安北道の鴨緑江の上流に筏のりに出稼ぎしていました。父の仲間は二十人くらいと聞いた。時には馬賊に襲撃されるとも聞いています。毎日母の心配は一通りではありません。朝と晩は父のお膳もつくりました。川蟬を捕ってきた朝、母は「綺麗な鳥やな。捕ってきてうれしいだろう。それでも川蟬を籠にいれて苦しめていると、お父さんの躰にさわりと大変やな。お母さんはそれを心配して昨夜は一晩中眠れずでした。川蟬を放してやったほうがいいのとちがうや

ろうか」と、兄弟の顔を見ながらしんみりと話しました。

私は兄が何とつかじっと聞いていました。少しして兄が「お父さんの躰にさわると大変やな、お母さん」と言いました。母が私の方ばかり見ながら「そうなんや。お母さん心配で夜も眠れんのか」とかさねて言いました。兄は「そんなら茂夫、お母さんの言うとおりの川蟬を昨夜の巣のところへ連れて行って放そうや」と言いました。私もほしいなと思ったが、兄の言うとおりの、昨夜のところに放鳥に行きました。川蟬は巣など見向きもしないで川幅百米の瀬を飛び越えて向こう岸にずっと姿を消しました。

私の家は父も母も兄も私もみんな小鳥ずき。ことに雀、山がら、目白をいつも飼っていました。松阪に来てからは、小鳥店の主人の親切な指導で、鶯、頬白を専門に飼うようになり、兄は岡崎でるり、こまを専門に飼いました。野鳥の会に入ったら、「どんなに小鳥にうまい餌をやっても大事に飼っても大自然に自前で餌をして飛びまわることが野鳥には一番幸福なんです。山口、籠の中で鳥を飼うのは止めなさい」と忠告され、その通りと全部放鳥して以来籠も納屋にしまいました。

#### ☆ バードソングシャワーの一日

熊澤 正継

5月1日、雨の連休の合間をぬって愛知県設楽町の段戸裏谷へでかけました。

早朝に着いたがもやがかかってどうにか曇りという天気である。陽はでていないがミソサザイ、ウグイス、コルリ、コマドリなどのさえずりが自然観察路に一步入るときこえる。ここは特にミソサザイのさえずりが多い。

観察路ぞいに川が流れているからか？しばらく行くとオオルリのさえずりも聞こえてきた。艶のある鳴き声の最後にジジと入る特徴でオオルリとわかる。ヤブサメ、センダイムシクイ、ヒガラ、カケスの声も聞こえている。姿を探すのはなかなか大変だが、さえずりは堪能できる。

家でCDで聞いた鳥の声の復習をしているようだ。さっそく勉強の成果がでた。あれはエゾムシクイの声だ。なにか金属的で息を吸いながら吹く口笛の音に似ている。ジュリジュリ、ジュリジュリとカラ類の声が聞こえてきた。双眼鏡で探すとエナガが入った。もう雛

を育てているのか、長いしっぽがわん曲していた。キビタキもペアでおおきなブナの上層部をフライキャッチングしながら移動していた。



観察路の終点近くでコマドリのさえずりが一段と大きく聞こえる。近づくと、徐々に移動して行くが鳴きやまない。しばらくしてや

っと姿を見つけることができた。笹からでた小枝に止まってさえずっていた。ヒンカララララとさえずるとき全身が震えている。しば

らく見とれていた。観察路をでて入口の段戸湖に戻って来るとルアーづくりの人達がたくさん来ていた。

#### ☆ 大台ヶ原、和佐又山の野鳥

谷本 勢津雄

5月3日、4日、5日に大台ヶ原の隣にある和佐又山に行って来ました。あまり知られてはいませんが、大峰山系のはずれに位置しており登山者で賑わっているところです。宿泊もでき、キャンプもできるのでテントの中から夜の鳥の観察ができる？良い場所です。去年大台ヶ原にいったときは夜の鳥が少なく少し寂しい思いをしたのですが、今回は満足して帰ることができました。

3日、4日の夜はブッポーソーとコノハズクの鳴く声と、誰かの悲鳴のような？ヒーヒーというトラツグミの声に囲まれて眠りにつきました。特に、トラツグミは遠く近く何羽もの声が聞こえ、コノハズクも少なくとも3カ所くらいから声が聞こえました。明け方、4時半頃からのコーラスはうるさいくらい声が聞こえます。まず、ヒガラのツピツピツピという細かい声、ゴジュウカラのフィッフイッという力強い声のカラ類から始まり、アオゲラのピョーピョーという鳴き声やドラミング、渡ってきたばかりのコマドリのピンツルルルという勇ましいいななき、アオバトのオアオーオアオーというもの悲しい鳴き声が聞こえます。

遠くでポポポポとツツドリの声とトッキョッキョカキョクのホトトギスが鳴いています。ウグイスも彼らに負けじと鳴いています。まだコノハズクもトラツグミも鳴いています。カケスが林の中で数羽鳴きあって移動してい

ます。ときどき林から他の場所へ移動するのにテントの上をふわふわと飛んでいきます。朝ご飯を食べて和佐又山に登ります。登るといっても、頂上までわずか30分でいけます。ゆっくり廻って1時間30分くらいです。ヤマガラ、シジュウカラ、コゲラの姿が近くでみる事ができました。健脚の人は大普賢岳に挑戦されるのもいいでしょう。登り4時間下り2時間半のコースです。頂上は大台ヶ原の日出ガ岳よりも高いので途中からトウヒの純林を見ることができます。そこまで行けばルリビタキやビンズイの姿も見られるかもしれません。

ここへ来るのは初めてなので、どこへも行かずここだけで2泊過ごしましたが、コースの目安としては、まず土曜日の午後ここへ来てテントの用意をします。標高1,200メートルあるので防寒着をお忘れなく。食事はロッジにいろいろメニューがあるのでそこですればいいでしょう。桧のお風呂もあるんですよ。夜テントのそばで鳥の声を聞きます。朝は4時半頃から朝食をとることができます。6時頃までコーラスを聴いて、お弁当を持って大台ヶ原へ出かけます。30分ほどで大台ヶ原駐車場に到着します。お昼過ぎまで観察して帰るコースと、大普賢岳へ登るコースが考えられます。大台ヶ原に負けないくらいの場所です。みなさん一度行ってみたいはいかがですか。

#### ○春のサシバの渡り

吉居瑞穂

一般に春の渡りは秋ほどまとまって渡ることが無いと言われています。秋に合計3000～5000羽の渡りが見られる伊勢市藤里町も、春はこれまでに100羽にも満たない数しか観察されていません。そこで、昨年から少し真面目



に春の渡りの観察を始めました。今年は 3月30日の初認以来、雨の日を除いてほぼ毎日、午前 8時～10時の間を中心に調査しています。これまでの調査結果からサシバの数は次のようになりました。

○ 3月30日： 1	
○ 4月 1日： 9	4月13日： 12
2日： 2	14日： 0
3日： 6	15日： 34
4日： 9	16日： 未調査
5日： 9	17日： 0
6日： 1	18日： 11
4月 7日： 13	4月19日： 0
8日： 3	20日： 0
9日： 2	21日： 7
10日： 0	22日： 未調査
11日： 未調査	23日： 27

12日： 5 合計：151

他にノスリ、ミサゴ、ハイタカ、オオタカ…が若干、観察されていますが、渡りでないものもいます。また、渡りと思われる10～40羽のヒヨの群れが時々、通ります。サシバはいつも、ほぼ 9時前後に現れますので、同じねぐらから飛び立つのかもしれませんが。

秋に比べ春はなぜこんなに少ないのでしょうか？ そこで、仮説として渡りの時のサシバの習性を「秋は南へ、南へ、春は北へ、北へとコースを取ろうとする」ものと考えています。従って、春は伊勢よりもずっと北を通っているのではないかと考えています。秋についてはこれまでのデータで説明できそうですが、春について説明できる情報は今のところありません。

## 短歌投稿

- わがすがたみとめし鴨は次々と  
水尾をひきてきそい来るなり
- 速にえを残せしままに春はすぎ  
百舌の啼き声里より消ゆる



廣 八太郎

## お知らせ

○支部入会の手続きについて：

4月から（財）日本野鳥の会三重県支部が活動を始めました。三重県支部へ入会の意志を本部へ連絡・送金などがまだの方は、6月中に手続きをお願いします。本部から支部への「入会者の連絡」に時間がかかるため、手続きが遅れると支部報「しろちどり」第2号をお手元にお届けできない場合があります。

○木曾岬干拓地合同探鳥会：6/27（日）、9/26（日）、12/26（日）

いずれも午前10:00に弥富野鳥園駐車場に集合。

（他の月も、第4日曜日に同場所、同時刻に集合して探鳥会を行う）

○守田サギコロニー（上野市守田町）

日時：6月12日（土）17:45三交バス停「上野インター前」集合

解散：19:30

\* 開発に住みかを奪われたサギたちの苦闘の繁殖状況を見る。

問合わせ：武田恵世（ ） 山中久次（ ） 夜間に



○タカ調査と自然観察（上野市）

日時：6月13日（日）09:00三交バス停「友生局前」集合

（上野バスセンター08:45発高山行き乗車）

持ち物：弁当、水筒、雨具など

問合わせ：武田恵世（                      ）、山中久次（                      ）夜間に

○室内例会案内

日時：7月18日（日） 10:00～12:00

場所：松阪市産業振興センター2F人材育成室

所在地：松阪市中町（松阪駅から徒歩で約15分）

交通：三交市内循環バス川井町行き乗車、本町下車、バス停すぐ前です。

駐車場：車の方はセンター前か市役所の駐車場へ。

内容：「『野鳥についての話』の予定」（変更する場合があります。）

午後から理事会を開催します。

問い合わせ先：谷本勢津雄氏。

原稿送付についてのお願い。      編集部から

1. 原稿はフロッピーで編集部へお送りください。フロッピーはMS-DOS下で動作するTEXT FILEに限ります（絵図がある場合は別送ねがいます）。パソコン等ない方は下記へ手書き原稿を送ってください。パソコンに打ちこんで、編集部へ転送します。編集作業の効率化のためにご協力ください。

- ・北勢地区 加藤征甫 氏
- ・伊賀地区 山中久次 氏
- ・津 地区 平井正志 氏
- ・松阪地区 谷本勢津雄氏
- ・南勢地区 林 淳子 氏

2. 原稿の書式などは次のようお願いします。

- (1)できれば、400字詰め横書き原稿用紙に書いてお送りください。
- (2)この「しろちどり」の1ページのサイズは、400字詰め原稿用紙で5枚です。
- (3)氏名、肩書きなどは右肩上に記入願います。
- (4)カットなどありましたらぜひ送ってください。小さなお子さんが描いた鳥の絵などは大歓迎です。
- (5)原稿は返却しません（事務局保管）ので、コピーをとって提出ねがいます。
- (6)フロッピーディスクは、コピー後、事務局に保管し、手渡しで返却します。
- (7)もし、記事中に誤りなどを発見したら、すぐにお知らせください。次号で訂正します。

☆ 編集後記

皆さんのお力添えで新支部の機関誌「しろちどり」第1号、やっと発行に漕ぎつけることができました。ありがとうございました。たくさんの原稿をいただき、やむなく次号に掲載というものもあります。あしからずご了承ください。

表紙（しろちどり）平井正志 （文）木村京子  
題字                      濱田 稔  
カット                      今村 禎、鹿島素子、平井正志